

# 島根・トップコーチ

(第71号)平成21年4月3日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0016

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

## 【第71号発刊にあたって】

第71号は、**ボート協会理事長・宮本善行氏**  
(松江北高)にご登場いただきました。

これまで部活動の顧問として、多くの実績を残してこられました。今回は理事長として、卓越したリード力で競技力向上対策に関わり、実績を残されている状況や、指導論について語っていただきました。

## 【プロフィール】

昭和51年 津和野高校卒業

昭和54年 中京大学卒業(ボート部所属)

昭和54年～平成元年 島根県体育協会

平成2年～8年 松江東高校

(バレー部顧問2年、ボート部顧問5年)

平成9年～12年 吉賀高校

(陸上部顧問1年、バレー部顧問3年)

平成13年～16年 「04総体」推進室

平成17年～現在 松江北高校(ボート部)

## 【主な競技実績】

昭和53年 インカレ優勝

昭和53年 全日本選手権優勝

昭和55～60年 国体6年連続入賞

(2位1回、4位1回、5位3回、6位1回)

## 【指導実績】

国民体育大会

平成3年 少年女子フォア8位

平成4年 少年女子フォア8位

平成5年 少年男子フォア6位

平成6年 少年女子フォア4位

中国高校選手権

平成4年 男子ダブル3位

平成5年 男子フォア1位、ダブル2位

平成6年 女子フォア3位

平成8年 女子フォア3位

全国選抜中国予選会

平成4年 男子ダブル1位 フォア3位

平成5年 女子フォア1位

平成7年 男子ダブル2位

平成8年 男子、女子フォア両種目1位

\* 上記全国選抜出場

## 『焦らず、怠らず』

島根県ボート協会理事長

島根県立松江北高校男子ボート部

監督 宮本善行

## <はじめに>

このトップコーチの原稿依頼を受けることに戸惑いを感じたのが正直な思いです。

プロフィールからもわかるように選手指導に専念したのは32才で転職し、教員になってからです。それまでは、選手兼コーチで国体の選抜チームの指導、学校のコーチとして週一度程度の指導でした。どちらかと言えば、松江市民レガッタの企画などボート競技を理解してもらう社会体育活動に勢力を注いでいました。また、教員になってからも途中8年間のブランクをはさみ専門のボートは9年間の指導歴しかなく、実績も目を見張るものは何もありません。

ただ、昭和57年のくにびき国体を目指して帰県してから30年、国体というイベントのおかげと、当時の理事長、強化部長、事務局長な

ど周囲の人に恵まれて島根県のボート競技は着実に成果を上げて来た事実があります。その中で果たした私の微々たる努力を紹介することとします。

### <指導者の旬>

松江東高校時代、最初の2年はバレー部とボート部兼務でした。休日には練習時間をずらして2つの部を掛け持ちしていました。しかし、全く苦痛ではなくその時間を充実した時間と感じていました。その後5年目で中国高校を優勝して、男女とも全国レベルに手が届く位置に居ながら2年後転勤となりました。

吉賀高校時代には、他種目から学ぶことも多くこれをボートに持ち帰ればバッチリ全国優勝もできるクルーを育てられるような気持ちでいました。しかし、高校現場ではなく残念な思いをしました。

8年間のブランクがあけてから松江北に来てボート部4年目が終わろうとしています。塩漬けた保存食を戻したような、季節はずれの「旬」を過ぎたよれよれの状態で戻ってきました。最初は優秀な指導者の皆さんでも10年かかるのにと、正直いって指導者としての情熱も冷めていました。つくづく指導者にも「旬」があるのだと思っていました。

先の全国高等学校サッカー選手権で広島皆実高校の初優勝が話題になりました。その時、国立競技場に広島県内の指導者が駆けつけて応援しているという話をテレビ中継で聞いた記憶があります。指導者同士の絆の強さを感じました。

実は私も同じ目標を持っているさまざまな指導者とのふれあいを通じて、選手の成長に貢献できる楽しさを再び感じています。同年代の指導者はほとんどいなくなっていて、若い指導者の皆さんばかりですが、合宿等も快く引き受け

てくれ、その情熱で私の心を揺さぶってくれます。

今は指導者の「旬」なんて自分で創るものだと思います。季節が巡って2度、3度、退職してもまだチャンスがあるのではないかと。教員だけに限ってみると異動ルールもあり、情熱が冷めるとよく耳にしますが、「旬」は創れるのではないのでしょうか。

かつて、バレーボール9人制で京都国体を優勝された日立金属安来の石原正巳先生が「自分のバレーは十年かかる」と言われました。石原先生はかつて実業団リーグでも10年目に優勝されており、京都国体の時も就任されて10年目での優勝でした。

また、ホッケーの小桜先生が以前、「10年は偉大なり、20年おそろべし、30年にして歴史になる」と書いていらっしゃいます。

現役指導者に戻って4年、昨年やっと団体種目でインターハイへ、そして今年松江北男子としては10年ぶりに全国選抜大会へ参加できます。しかも2種目で出場権を獲得できました。

喋れないキャプテンと出会い「心の叫び」を引き出すための1分間スピーチから始まり、監督より長いミーティングをするキャプテン、日替わりキャプテンシステムを採用するキャプテンなどすばらしい生徒達のおかげで毎日を過ごすことができています。

もちろん目標は「全国一」ですよ。

石原先生の2度の優勝、小桜先生の言葉から学ばなければいけないと思います。

### <触媒の役割>

明治時代にはじまり120年を超す島根県のボートの歴史はそのほとんどが現松江北と、島根大学、昭和30年代からはじまる江津工によって創られてきたものです。歴史の重みは時とし

て排他的な世界を作ってしまうものです。

互いは相容れず選抜チームなどは夢でした。OB でない私の加入はそこに一石を投じることはできたのかも知れません。大学時代全日本の技術コーチから直接指導を受けていた私は最先端の技術、指導法を持ち帰っていたと思います。

群馬国体（昭和 58 年）を前にして、急に江津工業の土井先生が選手だけ松江に送ってきたことがあり、面倒を見たことがあります。このクルーは入賞を果たしました。その後国体において選抜は当然のこととなり、数々の実績を上げています。最近では 06 年の世界ジュニアの日本代表となった矢地（松江高専）、島田（江津工業）のように、一般の大会に高校生選抜クルーで参加して力をつけ、世界に羽ばたいた例もあります。

吉賀高校から松江に戻って来た年に県ボート協会の理事長を仰せつかりました。県全体の競技力にも陰りが見え始めている頃でした。自分のチームも持てず、県全体のレベルアップを図る立場になったこともあり、競技力向上への係わりを変えていきました。

まずは指導者の「やる気」からだと思って、県内の高校指導者に当時日本一のチームへ交渉して合宿に行ってもらいました。

一昨年インターハイ優勝者を出した中村先生と、島田君の生みの親でもありこの数年連続でインターハイ入賞を果たしてくれている江津工業の沖田先生の 2 名です。中村先生はせっかくならと生徒も一緒に押しかけました。日本一を経験することで先生方は「できる」を感じ取って来てくれたと思っています。実は先生たちが普段やっていることの確認作業でした。でもこの確認作業が「できる」という確信へ変わるのだと思っています。

しかし、指導者が変わっていくだけでは全国

で戦うことは困難なことは明白です。現在では指導者一人の力量でチームを作る事は、一人の人生をかけるに等しい戦いになります。それができる人はすばらしい人です。しかし、それをすべての指導者に求めることは残酷です。強化はスタッフ制で進めるのが得策です。

アメリカの経営学者が、「経営は計画すること、組織すること、統制・調整すること、動機づけること、これらを通じて人を育てること」と説いています。具体的には「目標を明確にして、組織して人を動かし、やる気を換気しながら人を育てること」です。中心となる指導者が目標設定を行い、手助けしてくれる人の協力を得て、それがうまく機能するよう反応を起こさせることが必要です。私は、触媒として自らは変化することなく化学反応を起こすことを目指しています。「触媒」としての役割は果たせてきたと思っています。

#### <組織化のために大切にしているもの>

「天の利、地の利、人の利、時の利」という言葉はご存じだと思います。「運」「環境」「仲間」「タイミング」とでも訳すのでしょうか。時として本当に「4 つの利」がうまく絡み合っていたことを経験できます。

バレー部顧問をしていた吉賀高校時代にメンバー 7 人で県内ベスト 4 に入らせてもらったことがあります。このとき「定期的に知り合いのコーチが来てくれた。」「伝手で県外のチームを紹介してもらった。」「内緒で県 1 位のチーム監督にエースはレシーバーであることなどを教えてもらった。」「2 つの中学校から選手が集まった。」などが重なりました。また益田地区全体で頑張ろうと盛り上がりもいました。このとき「4 つの利」は確かに働いていました。

「勝ちに不思議の勝ちあり」で勝つときは何

故か正のスパイラルが働きます。しかし、それは勝利についてのことであり勝てるレベルまで実力を引き上げておくことが重要です。そのためには指導者も選手も常にトップレベルを体感することです。トップレベルは日本代表やメダリストといったアスリートと毎日一緒に練習すれば簡単にできます。毎日難しいですが回数を増やすことはできると思います。

先の例のように出かける方法もあります。幸いにもボート界には強化部長の矢地君や松本君と言った全国的に名前の売れている選手がいます。2人のネットワークを利用してうまくオリンピック選手や全日本チャンピオンなどを毎年のように呼んでくれています。これは良い刺激と大きな財産になっています。これも「人の利」の一例でしょう。

しかし、「4つの利」もうまくコーディネートしないと時としてバランスを崩してしまうことがあります。これがスタッフ制の弱点です。このさじ加減がなかなか難しくて失敗することがあります。今もコツはつかめません。

#### <おわりに>

実績もなく指導者の皆さんに参考となる内容もありませんが、思いつくままに書かせていただきました。今の時代は旧態依然とした指導では通用しなくなっていることは間違いないと思います。さて、どうすればよいのか？とりあえず引き続き頑張っていきます。またご指導ください。

このような機会を与えていただき書いているうちに、自分にできることを改めて確認することができました。これが「できる」の確信に変わればよいと思っています。ありがとうございました。

#### 今月のことば

#### スポーツが与える 影響力（パワー）について

この度のWBCの野球で日本チームが優勝した瞬間、日本中が歓喜にわきました。

このニュースは、今世界中が経済危機に見舞われて、人々の心に不安が充満しているさなか、日本国民に大きな希望と勇気を与えました。

この喜びを見ていますと、スポーツが人々に与える影響力（パワー）の大きさを実感します。

その意味で、春の全国選抜大会で活躍した島根県選手の活躍も大きなインパクトがありました。

ホッケー女子の横田高は無失点で2年連続3回目の優勝。剣道女子の大社高は中国新人2位の実力を発揮して12年ぶりの3位。卓球女子の明誠高も中国新人1位の実力を見せて5位。中学校の全国選抜大会でも、卓球男子の平田中が島根県中学卓球界初の3位。

また個人では、福田康輔選手（なぎなた・出雲北陵）2位。持田賢教選手（弓道・大社高）5位。山本ゆかり選手（バドミントン・松徳高）5位。宇野信之選手（レスリング・隠岐養護）5位。富田亜教選手（ライフル射撃・立正大淞南）5位。波部真也選手（重量挙げ・出雲農高）6位。高岩周平選手（ライフル射撃・立正大淞南）7位・・・等、明るいニュースが沢山ありました。

また、ベスト8入りは成りませんでした。甲子園を沸かせた開星高が鉄壁の守りで優勝候補の慶応高を撃破した瞬間も感動的でした。

このように、皆さんが関わっておられるスポーツが、学校や地域の人々に感動や勇気を与えています。特に学校という多感な生徒集団では、スポーツの成果が話題を呼び、プラスの刺激として学校全体に大きな影響を与えます。

今島根県全域にマイナスの社会的刺激が余りにも多いような気がします。みなさんにはスポーツを通して、学校や地域により大きなプラスの刺激を発信する存在になっていただきたいと願っています。

競技力向上統括アドバイザー  
荊尾 俊